

その中にソ連軍が平壤へ来て、日本軍は抑留されました。我々は前後の事情を考えて隠忍自重、泣きの涙で歯を食いしばり辛抱するしかない状況でした。敗戦という異状事態に翻弄される経験は日本開關以来のこと。日本の戦争指導、戦局運営の拙さ、反省し将来二度と敗戦の憂き目を見て苦しむなんて事のないようにしなければならぬ。

### 満ソ国境の戦闘と抑留

香川県 大塩 義 武

私は香川県さぬき市津田町鶴羽に、大正六（一九一七）年十一月二日生まれました。家は代々半農半漁の生活です。三人兄弟で弟は大正九年生まれですが現役で満州に入隊、昭和二十（一九四五）年八月二十日、牡丹江付近で戦死しました。

妹は大正十三年生まれですが、昭和二十年四月病死しました。父親は私が十五歳の時病死して母親が家を守っていました。

私も指物大工をしていましたが戦争のため資材が無くなり店を続けることができなくなっていました。

昭和十四年一月、満州国の警察官の採用試験が高松市の武徳殿であり、受験しました。受験者八十二人あり学科で十二人合格、体格検査で九人となり、身元調査の結果、香川県では僅か五人が合

格となりました。

満州国新京特別市中央警察学校に入校、三月の特訓を受け卒業後、黒河省漠河国境警察隊額勤和哈達隊に勤務を命ぜられました。ここは北緯五十三度四分の満州国の最北端、零下五〇度以下になる人口僅か三百余人の町でした。日本人は二人か三人ほどの町で、日本式住宅も宿舍もない。そして隊舎の二畳間のアンペラの上で寝るようなそれはそれは粗末なものでした。

僅かな日本人も半年位で転勤してしまい、三年位経ったら二人だけになってしまいました。一年足らずで満州語の三等の検定試験に合格し、頑張つて、いろいろの事件を経験しました。

昭和十七年六月、内地で結婚し同十八年長男が生まれ、現地では産婆役や医者役もやり、発疹チフスが流行した時は大変でした。

さらに下流の遼克県奇克隊（中隊）高灘隊（小隊）に転勤となりました。

昭和二十年五月十七日、応召を受け満人の部落民総出の見送りを受け、妻と子供（男一歳）を残し孫呉に入隊しました。現地の人達が留守家族は面倒見るから心配するなど強く言われ、それでは頼むと家族も残して入隊しました。

入隊して一期の検閲は狙撃兵として受け、良き講評を受けました。山に登り壕掘りで、連日暑い最中で陣地作りが続いていた八月七日、ソ連軍と戦闘状況になり、孫呉飛行場には日の丸機は一機も無く、ソ連の戦車があばれ放題でした。

我が山の陣地には山砲が据えられていましたが、戦車を二台破壊したあと間も無く、ソ連機が二機飛来し頭上を旋回していたと思う間もなく山砲は無残にも爆撃でやられてしまいました。その時私は頂上近くで壕を掘っていました。座れば首だけが出る位の深さに達していました。頭上を爆撃機が旋回し、二回目に私の壕が爆撃されてしまいました。

ちょうど私の目前五メートルに爆弾が落下、私

は円ピ(スコップ)を顔の前に立てていたために、赤く焼きただれた破片(三×一センチ)がスコップにカチッと当たり目前に落ちた時には、「やれやれスコップに助けられ命拾いましたか」と熱い涙がこぼれました。

十五日ラジオ放送がありました。八月十六日まで戦闘は続き、詔書が出た時は、まだデマだとも言われていたのですが、十七日には武装解除を受け、兵舎の近くでテント生活をしました。

国境警察隊も軍と一緒にりました。私のいた警察隊から、私の家族は最終のトラック便で孫呉に来て、北安に向け列車で出発したとの情報で安心しました。

八月二十日、私達の部隊は身廻品を背負い、十日間夜昼となく雨降る中を歩かされ、黒河へと移動行軍が続き、弱い者は暑さの中、倒れる者もあり、敗残兵のあわれさを痛感させられました。

道端で死んでいる者、馬はバンバンにふくれて

死んでいる。ソ連の軍用列車は略奪した物資を満載して走り過ぎていく。「ダワイ、ダワイ」の声を聞きつつフラフラで黒河に辿りつき対岸のブラゴエシチェンスクの収容所(仮設)に入れられました。

度々の使役に出る。街の至る所に共同住宅がありベランダと窓には日本人から略奪した着物類、風呂敷が飾ってあります。風呂敷なんかはネツカチーフとして女達の首を飾っていました。子供達からも馬鹿にされようでした。

悪夢の知らせか九月十三日の朝方(四時過ぎ)夢の中……葬式が出る夢を見ました。「あー、これは」家族内に不幸があったと推察していました。帰国して私の長男が引き揚げの途中栄養失調になり眼が見え無くなり、新京(長春)の小学校で共同埋葬したとのことでした。

九月二十日、はしけダルマ船にてブラゴエを下流に向けて出発しました。ハバロフスクまでは黒

竜江はきれいな水流だったが、松花江に合流した地点からは水質が変わり汚濁した流れになりました。ハルピン平野の汚濁した松の花のごとき「ごり水」が流れ込んでいるからです。

連日の雨がさらにひどくなった。雨ばかりで「ニン」の塩漬のスープが炊けない。それで生の塩漬が支給されました。生水を飲んで駄目だと言われても、喉の渇きに耐えきれず、生水を呑むものが多くなってきました。果たしてアメーバ赤痢になり、きたない事です。

ようやく一カ月余にして黒竜江河口近くのニコラエフスク（尼港）に到着、収容所に入りました。尼港事件のあった土地ゆえ対日感情も悪い所へ十月中旬のことです。

「防寒靴が無く編上靴で作業に出る。寒さのため、誰もが足踏みをして待っている。食事は悪く作業もきつい。多くの者が倒れ病院に運ばれて行く。病院といっても名ばかりで担架を並べた病床である。一つとして寝台らしき物は無い。医療手

当も満足にできたものはない。見殺しである。多くの死者が出た。班内も次第に人数が減って心淋しさこの上無し、死の恐怖が湧いてくる……」

私は体格が小さく、ずんぐりした骨組みの太い体格ですから、なかなか休みが取れず、いつも重労働に出されました。身体検査といっても尻の肉をつまんで引っ張ってタルミの具合を見ての検査です。体力が弱っていても休みが取れない。熱は三八度以上ないと認めてくれなのです。

尼港は荷役作業が多い。遂に栄養失調のため作業中どんなになったのか。急に眼がカスミ見え無くなってしまう。もう終わりかなと思った。意識を失ってしまった。倒れた。それからもうわからない。ハッと霞が消えると共に目が見え出した。アラツ目が見えてきた。カスミが取れた。不思議だ。気が付いた。……。

不思議な現象ではないか？ 考えれば考える程不思議な事ではないか、私の腰に吊ってある飯缶

(缶詰の空き缶)の中にフト臭いのきつい青い物が入っている。アーこれは小麦のバラ積みの船底の板の隙間に芽を出した小麦が根を出し、十センチ位に成長した小麦の芽(草)である。この小麦のキツイ臭いによって私の視界が暗黒から開かれたのだ。何と不思議な事だ。

私の幽体が船底まで行って持ち帰ったとしか判断できない。その間約十分間を要する、その間気を失っていたのだ。世に言う「臨死体験」である。

私の幽体が小麦の芽を持ち帰り、体を蘇生させたのである。皆様がよく言う「三途の川」で中程まで行き、人の呼ぶ声で渡らずに帰り、助かったという事は耳にするが、私は自身の幽体によって助けられたと思考する。

小麦の芽の生命力が私の生命力を動かし蘇生したとしか、他に考える余地はない。

長い一カ月、断食生活は無駄では無かった。ここにおいて不思議と表現され私の心を深く心底から感動の波にゆさぶられる。感涙しばしである。

誰に話しても信用されないだろう。私の胸にだけ奥深く収めたかった。

しかし、それから数日後、体の変化があり、熱も三九度出て、外科医の竹岡軍医の診断を受けた。先生が何か不思議な顔をして診ている……。「竹岡先生、実は不思議な体験をしたのです。夕食後三十分ほど先生に御相談をして色々教えて頂きましたのですが、いかがでしょうか」。夕食後今までのいろいろな体験をした事、国境警察隊及び断食中の経験、あらゆる事を先生に不思議な事を漏れなく詳細に説明したところ先生は、  
「それは貴重な経験であり世の中には、いろいろ実例もある。警察関係の事は特にソ連は目をつけている、何とか陰ながら力添えをするから頑張つて祖国に帰るよう」こんなこと言われた。

ニコライエフスクでは三回の取調べを受けている。我が友人は一人ずつに監視付きでハバロフスクへ護送されている。

私は尼港で三回目の取調べ拷問により病院内の兵隊達の動向調査報告指令を受け、元憲兵協和会、反動分子等です。三日三晩、不眠でコップに水をついで眼前に置き喉が渴いても飲ませずとも辛い拷問でした。同胞を売る訳にいかず、いつも情報兵からボロクソに言われていました。

また病院で、馬も七頭の世話をすると共に、解剖室に死亡した兵隊の運搬でした。小屋の中には十体位の切り裂かれた死体が寝台にあり、縫合されることなくそのまま捨てられるのです、悲惨そのものでした。

尼港収容所は多数の（三、五〇〇余）の死亡者を出して、昭和二十一年四月閉鎖する事になりました。

私は最終のコムソモリスク行きの船に乗せられ特別収容所（元憲兵・特務機関・協和会警察官・反動分子・要注意人物）に収容されました。ここは小高い山の頂上の収容所で、全山鉄条網が幾重にも張られ逃亡できるような場所ではない。水道

設備も無く、百分の仕事をしなければ収容所へは帰れず、帰りは明朝の水をあらゆる物に入れて持ち帰る状況です。

一方的に戦犯を仕立て上げ、苛酷な労働に服させるのです。誰もが無口で落ちぶれた哀れな淋しい姿です。死ねば死ね、死んでも誰一人手を合わす人もなく捨てられるのです。

重労働に従事するため、もう体はボロボロです。遂に倒れ、傷口も化膿し、病院に行く事になり診断を受けたのです。

ニコライエフスク収容所でお世話になった竹岡軍医でした。「大塩帰っていなかったのか、閉鎖されたので帰ったものと思っていた」外科の診断でしたが先生が聴診器を当て急に「横隔膜が黒くなっている。大変な事になるぞ注意せえよ」と言われた。私はその瞬間「アー、これは先生の謎かけの言葉だ」と思う。外科で診察しているのに内科の診察である。小声で「今晚会って話をする」と言われた。

落ち合う場所に行き先生は「長くいては命がない。危険が迫っている。患者が一団体ナホトカへ出発する。何とかしてその中に入れてやる。僕の願いも沢山ある」と。二人は密談を交わした。私は先生の要求された重要事項、連絡先等を極薄の美濃紙（三センチ×十五センチ）に書き込み、私はチビだからソ連兵の古服、袖を二重に折り返して、触つても揉んでも音がしないように縫い込んだ。なるべく使役に出てロスケの軍医の診断を受けないようにしてソ連が一番嫌がる肺病の患者になった。

患者団体としてナホトカに到着した。患者団体より若者二十人が日本へ帰るのは早いから、もう少しソ連のために残りたいと申し出た。この団体は民主教育が行き届いていると見なされ、第二收容所の身分関係の調べを受けることなく第三收容所（主に税関検査）で書いた物、色々な私物品を出し検査はパスした。

昭和二十二年九月下旬「恵山丸」に乗船、帰国することができました。竹岡先生の留守宅へは早速お手紙に詳細を書いて連絡し、任務を終了しました。

私は不思議な因縁に恵まれ、神仏の加護を受け満死に一生を得て生き返ったのです。「人事を尽くして天命を待つ」。

私の妻は引き揚げる時、孫呉から北安行きの列車に乗ったとの情報で一安心しておりましたが、戦後、妻が子供を現地で亡くしています。帰国後の話によると、北安行きの列車に乗れず、北安から南下して新京（長春）で長男が死亡し、長女も生まれたが母体が衰弱していたので未熟児ですぐ亡くなったとのこと。妻は看護婦として使われ、コロ島で土産品店に勤め、昭和二十一年六月、コロ島から引き揚げて参りました。

私が昭和二十二年九月、帰国してから裸一貫無一物からの出発で我無沙羅に働き、木工業（建具家具）に一心に打ち込んで参りました。

郡の地区の組合長にもなり、商工会も三十余年間各役職を勤め、「お四国詣り」（四国八十八カ所詣り）も、戦友の冥福を祈りつつ、三十七回廻りました。

平成九（一九九七）年五月十七日、総本山善通寺にて得度、僧籍にも身を置きました。写経も二千三百巻を納め、お布施をいただかない修業僧として勤めています。

私は人から古い事をよく覚えていたなあと言われるが、何回も生死の境に立ち、辛酸苦汁が五臓六腑骨身に深く浸み込み、忘れるに忘れる事ができない大きな大きな心の傷跡で、これ以上の出来事は無いだろう……。

大きな手術をすれば必ず傷跡が残るでしょう。私の心の傷跡も深く深く残っている、と話をするので。六十余年経過しても想い浮かんでくるのです。

## 回想

- 1 貴重なる幾難の体験も時の流れの渦潮に巻き込まれ風化していくあわれさよ
  - 2 山川は萬世人に尽くす、人は欲心あれど百年の命、鈴を振り振り四国の土を踏む
  - 3 人の汚れも地球の汚泥も大海は受け入れ浄化して清めの水となり塩となる
  - 4 人は万年春を保ち得ず貴き人も貧しき人も死して灰塵となり消えてゆく
  - 5 念仏の声も聞かず切り碎かれ死んだ友の冥福祈りつつお四国詣りの鈴がなく
- 師匠より逆修戒名を戴き、逆修墓も建立（平成九年九月吉日）している。病氣と仲良くしながら生きる道を歩んでいる。合掌。